

# 日本民家園だより

特集 家で生まれる、家と育つ

vol.84



企画展示「家で生まれる、家と育つ -子供の習俗とくらし-」  
2016年1月5日(火)~5月31日(火)  
同時開催「こみんかなんだろう?」

# 家で生まれる、家と育つ

— 子供の習俗とくらし —

## はじめに

昔の家が今の家と大きく異なることのひとつは、家の中で新しい命が生まれ、家の中で家族が死んでいくということが挙げられます。そのため人と家とのつながりは、今よりもはるかに強いものでした。家にとって子供は後を継ぐ存在であり、貴重な働き手としても見られていました。この稿では家の中での出産と子供の居住空間についてご紹介します。

## 子供の誕生

**家での出産** 昭和30年代頃までは、自宅での出産が広く行われていました。出産を迎えた妊婦は、実家に戻って出産することが一般的ですが、農作業が忙しく実家に戻る余裕がない場合や習慣として実家に戻らないという場合は、嫁ぎ先で出産しました。家の中での出産場所は、ナンドやザシキなど普段は寝室にしている部屋が使われました。旧菅原家（山形県鶴岡市松沢）では、出産場所にムシロやコモズ（ワラをスグッタカスの部分）を敷き、その上に布団や薄い布団状のものを敷いて床が汚れるのを防ぎました【図1・2】。

**産婆** 出産の手助けをしてもらう産婆はあらかじめ依頼しておき、妊婦がいよいよ産気づくと産婆を急いで迎えに行くということが多かったようです。産婆はトリアゲオバアサン（旧清宮家）、

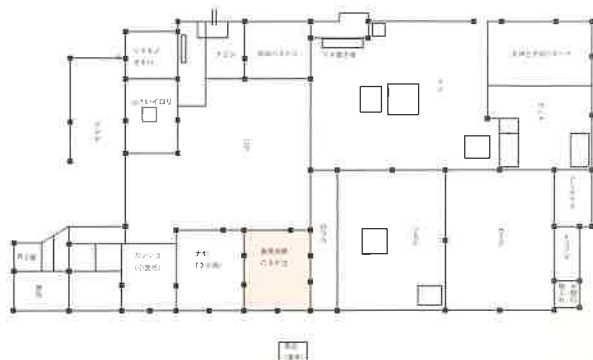
オサンバサン（旧菅原家）、オサンバ（旧伊藤家）などと呼ばれていました。産婆には職業として行う者もありましたが、もともとは村の中で経験豊富な老女が頼まれるということが多くみられました。産婆の役割は、赤子を取り上げるだけでなく、命が危険にさらされる産婦や赤子を無事に導くための呪術者的な役割、さらに生まれた赤子と仮親子の関係を築いて生涯その成長を見守る風習もありました。

**産湯** 産湯には井戸の水（旧清宮家・旧佐々木家）や湧き水（旧広瀬家）、川から汲んできた水（旧北村家）などが使われ、これをカマドで温めてタライに入れました。力綱につかまった産婦を「腰抱き」とよばれる役割の者が背後から抱いて支える出産方法があり、このような場合には男性が出産に立ち会いました。しかし、多くの場合は、出産場所への男性の立ち入りを厳しく禁ずる地域が多く、たとえ夫や子供であっても入ることは許されませんでした。旧広瀬家（山梨県甲州市塩山上萩原）では、男児がオサンバサンを連れてきた成り行きで出産場所に入ってしまったところ、オサンバサンに大変怒られたそうです。

**えな 胞衣の処理** 胞衣の処理は、古くは呪術的な意味合いの強いもので、各府県で処理方法に規則が設けられる明治20年代以前は、埋める方法が一般的でした。埋める場所は、家の玄関の敷居の下や家の外の軒下のあたりなどよく人が踏む場所がいいとする地域、それとは逆に人里離れた山中や墓地などあまり人が踏まない場所がいいという地域があります。いずれにしても、胞衣をあの世とこの世の境界を暗示させる墓地や家の内外の境目に納めることが、生まれた子供や産婦に強い影響を及ぼすと考えられていたことがわかります。



1. 出産場所だった旧菅原家のネドコ（昭和45年）



2. 旧菅原家の間取り図（移築前）

普段は長男夫婦が寝室として使うネドコを産産場所に使った。

**居住空間と家族領域** 民家の内部は、居住空間と土間空間の2つに大きく分けられます。居住空間には寝るための部屋、日常の行事や接客、炊事、食事、家族団らん、夜なべ仕事の部屋（ヒロマ・カッテ・オエ）、改まった接客、冠婚葬祭の部屋（デイ・ザシキ・オマエ）があり、こうした用途に応じて家族は部屋を使い分けていました。一方で居住空間には、家族それぞれが持つ領域も関係していました。例えば、家の中には家長、主婦、先祖、若夫婦などの領域があり、子供もそのルールに沿って居住空間を利用していました。ここでは旧江向家の間取りを例に説明します【図3】。

**オエと炉のまわり** オエは炊事・食事・家族団らん・接待をする場で、家族も来客も使用しました。乳幼児がいる家では、藁などで作った子供を入れておくためのエジコをこの部屋に置いている地域もありました。日中、農作業などで家族が出払った家では、エジコに入れられた子供がオエで一人留守番をしました。旧工藤家（岩手県紫波郡紫波町船久保）ではこの入れ物をインツコといい、2～3歳頃までの子供を入れて育てました。

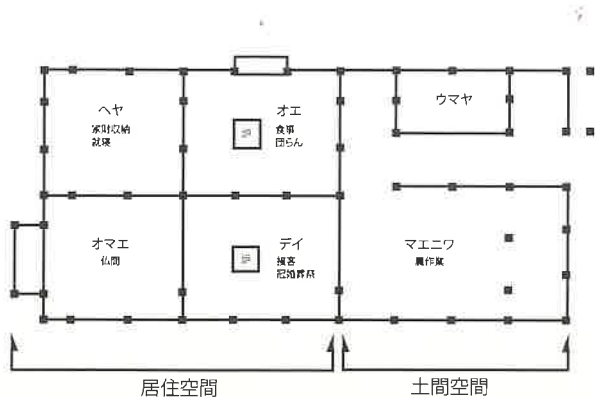
オエには炉が設けられており、家族領域が顕著に表れるのがこの周囲です。炉の座は、家族の役割に応じて位置と名称が決められました【図4】。子供たちはカカザの周辺のあいた所に座るといわれますが、子供が母親の周辺に集まったり、幼児が若い嫁の座るシモザ近くに寄りたりするのはごく自然な行動とも考えられます。秋田の男鹿半島などでは嫁のいる座を子供のいる所という意味でアコジャ、伊豆の新島ではコイドと呼んでいました。

**寝室** 衣類や食料の収納場所であったヘヤ（ナンド）は、一般的に家の主人夫婦の寝室ですが、小さいうちは子供も両親と一緒に使用しました。そして大きくなるとほかの部屋で寝るようになりました。旧菅原家では、2つあったコバヤの片方が子供の寝室になっており、大きくなると両親の寝室であるウヘヤからコバヤへ移ったそうです。旧作田家（千葉県九十九里町作田）では、祖父がナンド、両親がオクノマを使い、子供たちはそのほかの場所を好みに応じてその時々で使ったといえます。部屋を固定せずに空間を自由に利用する子供の過ごし方があったことが窺われます。

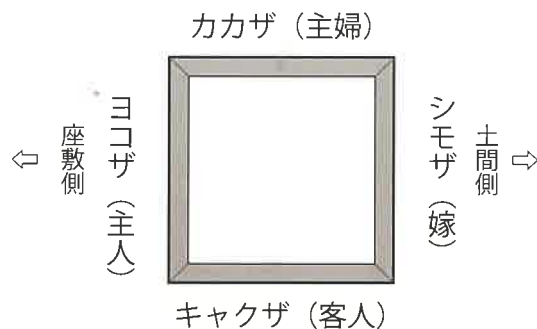
**勉強場所** 子供部屋のような個室はありませんでしたが、勉強は決まった場所でやっていました。旧菅原家では冬の間、炉とは別にホリゴタツが設けられ、ここが子供たちの勉強場所になっていました。また、旧三澤家（長野県伊那市西町）では2階、旧広瀬家では来客用のザシキに文机が置いてあり、普段は子供たちが勉強などに使っていました。いずれも暖かくて静かな条件の良い場所を選んでいたようです。

**兄弟姉妹と一緒に** 兄弟姉妹たちは場所も道具も共有して生活していました。旧山下家（岐阜県大野郡白川村）では、大人は1人1つ火入れを使用しましたが、子供たちは2、3人で1つ使っていたそうです。子供たちが自然と一つところに集まって生活していた様子が窺えます。

**行動範囲の拡大** 乳幼児期は子守をする祖父母や若い兄姉の領域で過ごしますが、大きくなると家族の目につく場所や家の近くを行動範囲にし、やがて家から離れた場所でも遊ぶようになります。子供は、家族の領域内から領域外へ徐々に活動空間を広げながら成長していくのです。



3. 四間取りの部屋の機能（旧江向家の場合）



4. イロりのまわりの家族領域

※図は『図説 民俗建築大辞典』173頁「一般的な座の名称」に一部加筆

# 子供が使った道具

## 着るもの



アサカタビラ 夏用の着物。

## 遊び道具



(左) ハゴイタ

親が子供のために手作りしたもの。

(下) 子供用ソリとワラゲツ

冬、子供たちはソリやスキーで雪遊びをした。



## 子守の道具

インツコ

赤子はい回らないように入れておく入れ物。



ワタイレネネコ

冬の寒い日、子供をおんぶする時に羽織った綿入れ。

## 手伝いの道具



バンドリ

荷物を背負う時に使う背中当て。

## 勉強道具



(左) 「小学読本(巻一)」

読み書きの学習に使われた教科書。



(右) ソロバン

計算をするための道具。

## 治療の道具

(左) 薬袋

旧三澤家で販売されていた子供用の薬「小兒犀角円」の袋。

(右) 百日咳除けのしゃもじ

百日咳や病気を除けるため咳の神様にしゃもじを奉納する風習があった。



日本民家園だより vol.84 発行：平成28年1月5日

川崎市立日本民家園 URL <http://www.nihonminkaen.jp/>

〒214-0032 川崎市多摩区枡形 7-1-1 TEL 044 (922) 2181 FAX 044 (934) 8652

交通 小田急線「向ヶ丘遊園」駅下車南口より徒歩13分

開園時間 [3～10月] 9時30分～17時 [11～2月] 9時30分～16時30分 (入園は閉園30分前まで)

休園日 毎週月曜(祝日の場合は開園)、祝日の翌日(土・日曜の場合は開園)、12月29日～1月3日

入園料 一般500円、高校・大学生300円、65歳以上300円(川崎市在住の方無料)、中学生以下無料